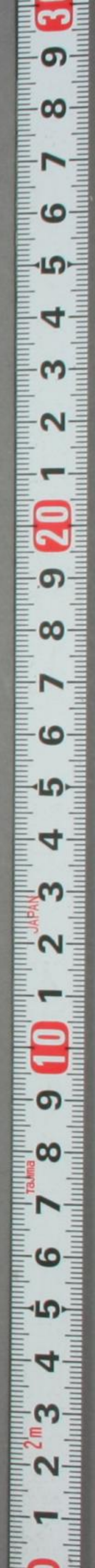


連歲叢書

四拾壹

特別  
14  
696  
137









696  
137



總目錄

一 鈴廼屋翁見石手譜

一 茂乃身名

一 野洲郡大御堂寺大坊緣記

一 作舞上八幡宮御由緒見名記

一 宗祇傳

一 葛山實錄





鈴屋公羽畧年譜

全



鈴屋公好四十年譜序

考のりしむる事... 鈴屋公好の事... 四十年の事... 譜の序... 公好の事... 四十年の事... 譜の序... 公好の事... 四十年の事... 譜の序...







鈴屋翁略年譜

世系

延曆御後平高望朝臣之裔權大納言頼盛子世孫

平建郷 本居縣判官 武遠 兵部大輔 武秀 兵部大輔

直武 左馬助 武基 兵部大輔 武之 和泉守

武貞 左馬亮 武延 左衛門尉 武重 左馬亮

武利 左衛門尉 武連 惣助 延連 左衛門尉

某 家号政小津 七右衛門 某 三右衛門 武秀 左兵衛

定治 三四右衛門 定利 三四右衛門 定治 三四右衛門

宣長 家号復本居 春庵 中衛

母村田孫女所豊高女勝子

鈴屋公翁略年譜

重保 五月七日子ノ刺紀伊殿の初めを伊勢國飯部郡松坂の里あり

十六 二歳

十七 三歳

十八 四歳

十九 五歳

二十 六歳

元文 七歳

二 八歳

三 九歳

四 十歳

五 十一歳

寛保 十二歳

国七月廿四日父定利主没りりぬ  
○字か之助四郎と改めり  
右に業成と云ふも○秋叙松平の孫に  
四重と讀始り又獲樂の謡曲と習ひり



|    |  |     |
|----|--|-----|
| 二  | 七月因々々大和國吉野峯坐水命神詣り  | 十三歳 |
| 三  | 延亨 十月廿二日元辰   | 十四歳 |
| 二  | 此項より尋常處の如きもの○七月より濱田瑞雪と號し射と名あり○又其の茶の湯の式も別○既正任後と號し五經と讀み奉り                    | 十五歳 |
| 三  |  | 十六歳 |
| 四  |  | 十七歳 |
| 實延 | 四月より終るまで延ばの多賀の大社に詣り九月より廿二日頃大坂下り廿五日伏見に宿を定め東へ立寄り五月に朝野の京の罷立と觀望の四りより廿二日六日松原に宿り | 十八歳 |
| 二  |  | 十九歳 |
| 三  |  | 二十歳 |
| 實曆 | 二月廿八日兄定右に告げし波りつゝの如き事なりと大分宛と副り○三月は下り七月十日に歸ると云々物事より易生、考も考りあり事あり              | 廿一歳 |
|    |  | 廿二歳 |

|    |  |     |
|----|--|-----|
| 二  | 三月初の如き高上りつゝ堀屋山に詣りて儒道と云ふもの<br>五の關富主の如きもの代り親類正徳と云々其の後小坂室所の南に於て其の考も考りあり○此の如き事小坂室所と云々本の<br>本居と號し | 廿三歳 |
| 三  | 九月よりと健藏と改め   | 廿四歳 |
| 四  | 五月西條武川幸房法眼の子と云々小児科の医術と云々の<br>室所の南の如きもの考りあり   | 廿五歳 |
| 五  | 三月名を宣長と云々春庵と改め<br>契沖が考せし百人首改親政と云々其の考りあり  | 廿六歳 |
| 六  | 七月京の如き小児科の醫と云々其の考りあり<br>考りあり○菅原直直の考りあり其の考りあり   | 廿七歳 |
| 七  |  | 廿八歳 |
| 八  |  | 廿九歳 |
| 九  |  | 三十歳 |
| 十  |  | 卅一歳 |
| 十一 | 直洲の伊勢大和山城と云々の考りあり<br>三依の考りあり其の考りあり<br>名考りあり其の考りあり<br>しつゝの考りあり其の考りあり                          | 卅二歳 |



|    |  |  |            |     |
|----|--|--|------------|-----|
| 十二 | 伊勢阿波津草深王孫女三子勝<br>信濃の善老守記今たをりし也                                   | 著述石上私淑言既成後<br>○手抄既成定成三年刻<br>○古令選讀成二年後刻<br>○古令常文要領成 | 古事記傳の稿を始りし | 廿三歳 |
| 十三 | 二月三日長男健藏春庭<br>主生   |  |            | 廿四歳 |
| 明和 |  |  |            | 廿五歳 |
| 二  |  |  |            | 廿六歳 |
| 三  |  |  |            | 廿七歳 |
| 四  | 正月十四日二男恭次郎<br>春樹生  | 九月草卷巻五五集成<br>難年                                    |            | 廿八歳 |
| 五  | 正月朔日母自没りし也<br>正月朔日師自没りし也<br>正月朔日此の病の女産業推<br>松坂清老也下り而於此<br>年空をりし也 | 九月朔日論同存此の辭成  |            | 廿九歳 |
| 六  |  |  |            | 三十歳 |
| 七  | 正月十二日長女忍生  |  |            | 四十歳 |
| 八  |  | 直臣靈祖鏡等花成<br>刻年                                     |            | 四十歳 |

|    |                          |   |     |
|----|--------------------------|---|-----|
| 安永 | 三月朔日母自没りし也<br>三月朔日師自没りし也 | 吉也<br>菅野記成<br>修年刻   | 四十歳 |
| 二  | 正月二日妻美濃生                 |   | 四十歳 |
| 三  |                          | 介<br>甲子   | 四十歳 |
| 四  | 正月五日三女後生                 | 晋<br>字音假字用格成<br>明解  | 四十歳 |
| 五  |                          |   | 四十歳 |
| 六  |                          |   | 四十歳 |
| 七  |                          | 二月朔日<br>叙我候言成<br>宣成<br>年刻   | 四十歳 |
| 八  |                          | 三月朔日<br>百集集五小考<br>集年刻<br>三月朔日<br>五編成<br>修年刻                         | 四十歳 |
| 九  |                          | 土月廿二日首白成<br>修年刻   | 四十歳 |
| 天明 | 此項より家の名を<br>録し居りし也       | 正月十六日<br>真田自白<br>三四年也<br>春の多集年<br>句草成<br>修年刻<br>九月廿二日<br>首白成<br>修年刻 | 四十歳 |
| 二  |                          |   | 四十歳 |
| 三  |                          |   | 四十歳 |
| 四  |                          |   | 四十歳 |
| 五  |                          | 信<br>子<br>三<br>年<br>刻<br>○十二月<br>録修年刻                               | 四十歳 |



|           |                              |   |                 |                 |                 |                 |
|-----------|------------------------------|---|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 六         | 七                            | 八   | 寛政              | 二               | 三               | 四               |
| 五月廿七日     | 五月廿七日                        | 五月廿七日                                       | 五月廿七日           | 五月廿七日           | 五月廿七日           | 五月廿七日           |
| 五画成 寛政元年刊 | ○古事記上巻の傳説成り自<br>形を以て書すの定政の始刊 | 正月河外成<br>○國號考成 今年刊<br>○五鏡百首詳説成<br>○古事記中巻の傳説 | 五月廿七日 神代正詔成 後年刊 | 五月廿七日 神代正詔成 後年刊 | 五月廿七日 神代正詔成 後年刊 | 五月廿七日 神代正詔成 後年刊 |
| 六人        | 廿六                           | 廿六  | 廿六              | 廿六              | 廿六              | 廿六              |
| 五十七歳      | 五十八歳                         | 五十九歳  | 六十歳             | 六十歳             | 六十歳             | 六十歳             |

|            |                              |           |           |           |
|------------|------------------------------|-----------|-----------|-----------|
| 九          | 八                            | 七         | 六         | 五         |
| 二月廿七日      | 二月廿七日                        | 二月廿七日     | 二月廿七日     | 二月廿七日     |
| 大後詞後釋成 後年刊 | 天祖都城解成 今年刊<br>○菅原氏物語玉小櫛成 今年刊 | ○古事記中巻の傳説 | ○古事記中巻の傳説 | ○古事記中巻の傳説 |
| 十六人        | 二十人                          | 二十人       | 甲人        | 甲人        |
| 六十八歳       | 六十七歳                         | 六十六歳      | 六十歳       | 六十歳       |



十

十一

○七月家譜修撰成  
 ○七月初山陽成上書列  
 ○鈴屋の文集歌集二書  
 調へりし年後列

○二月吉野百首詠成  
 ○古訓古事記成 年後列

○神代卷聖皇山麓成成  
 ○此項成の秋ありしに  
 ○と名つづめり

○地名字音轉用例成  
 ○疑齋辨成

○直督考不審辨成  
 ○臣道成 成  
 ○臣部書説辨加詳  
 ○本末の歌  
 ○尾張連物部連系圖成  
 ○言語活用抄稿  
 ○伊勢二宮さげの辨成  
 ○後撰集言葉の束緒成  
 ○身頃名子の問答成

廿八

廿九

六十九歳

七十歳

十二

享和

墓所と懸く標の名を建置  
 山むろりし年々の  
 花をいそいでん

○直督考不審辨成  
 ○臣道成 成  
 ○臣部書説辨加詳  
 ○本末の歌  
 ○尾張連物部連系圖成  
 ○言語活用抄稿  
 ○伊勢二宮さげの辨成  
 ○後撰集言葉の束緒成  
 ○身頃名子の問答成

廿八

廿八  
 廿九  
 廿八  
 廿九

七十歳

七十歳















我乃牙名





おんころ

のり

あま

り

し

し

し

あま

仲  
故





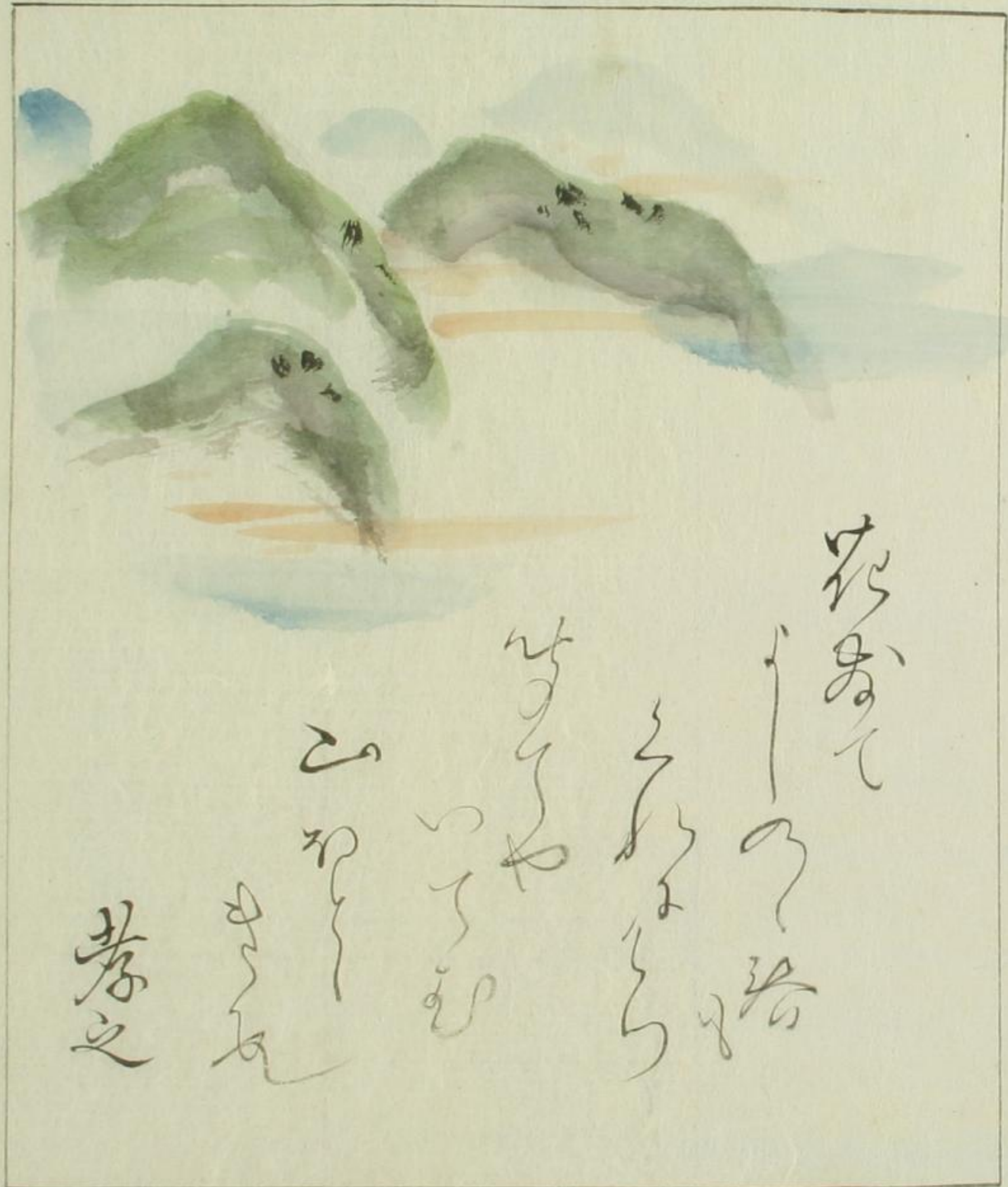












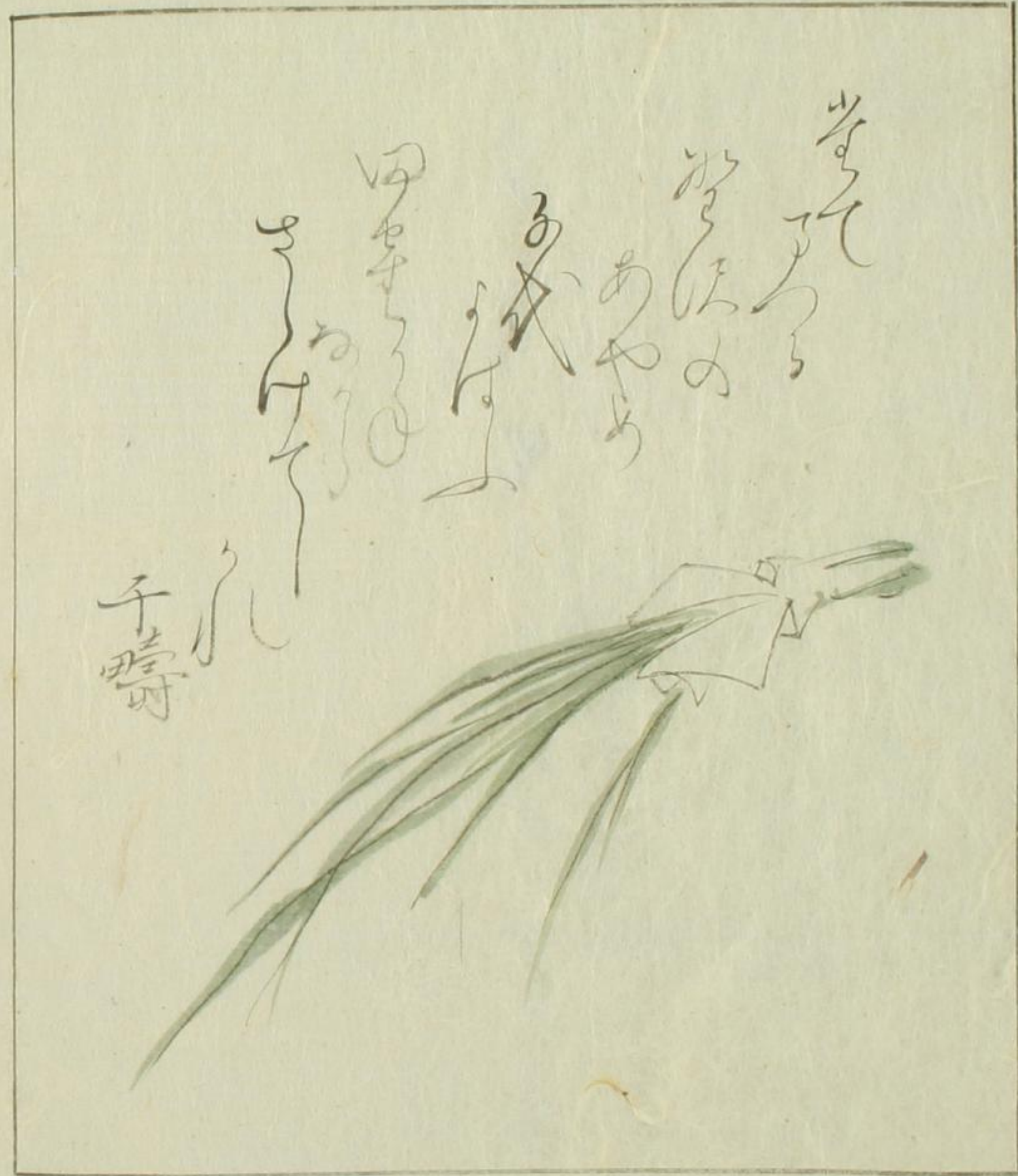








五月のさくら  
 花はさくら  
 かなさくら  
 暉陰



五月のさくら  
 花はさくら  
 かなさくら  
 暉陰

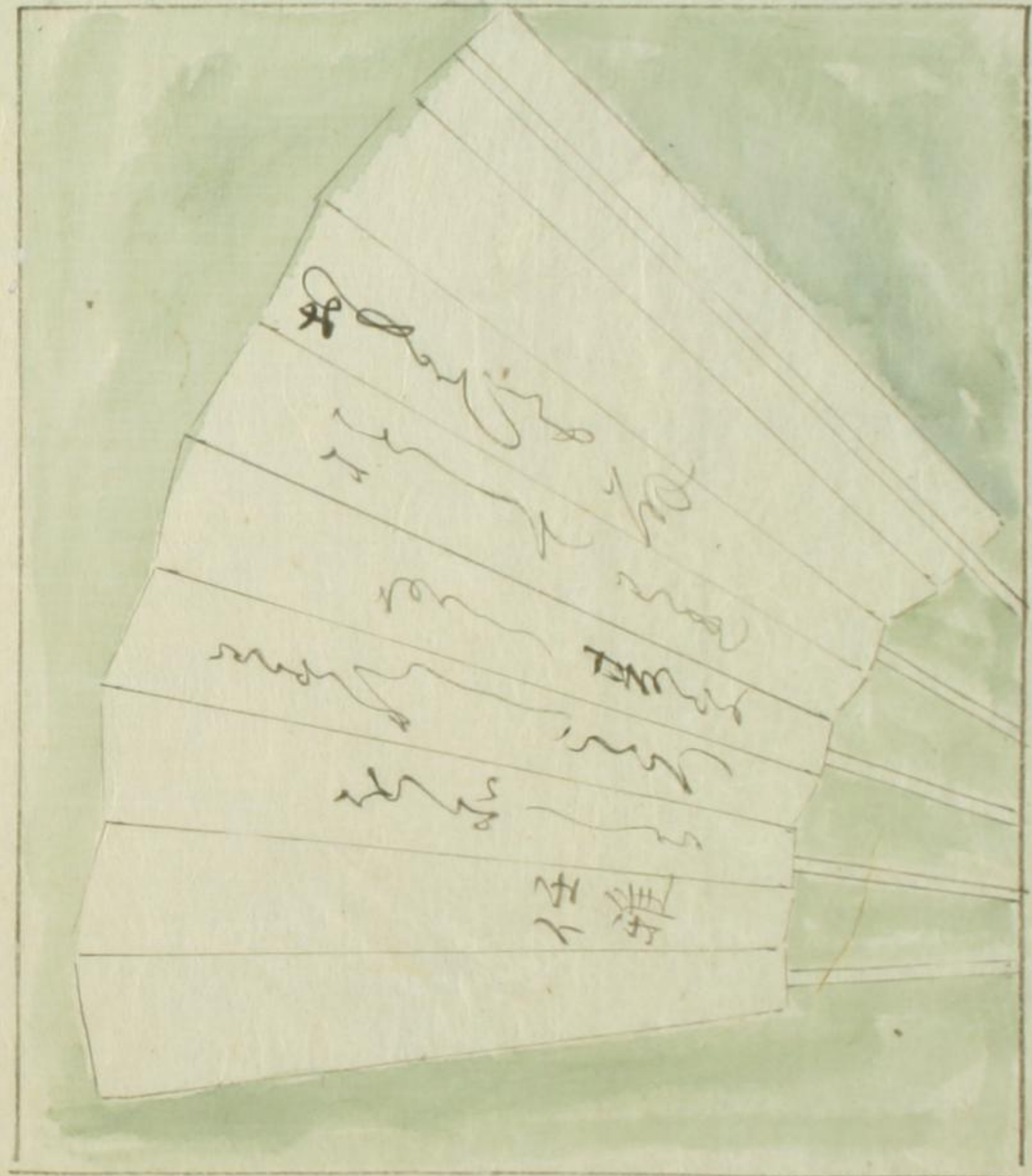








妹のあやりおのむすめ  
 乙乃川  
 舟出  
 伯淹



任雅  
 伯淹

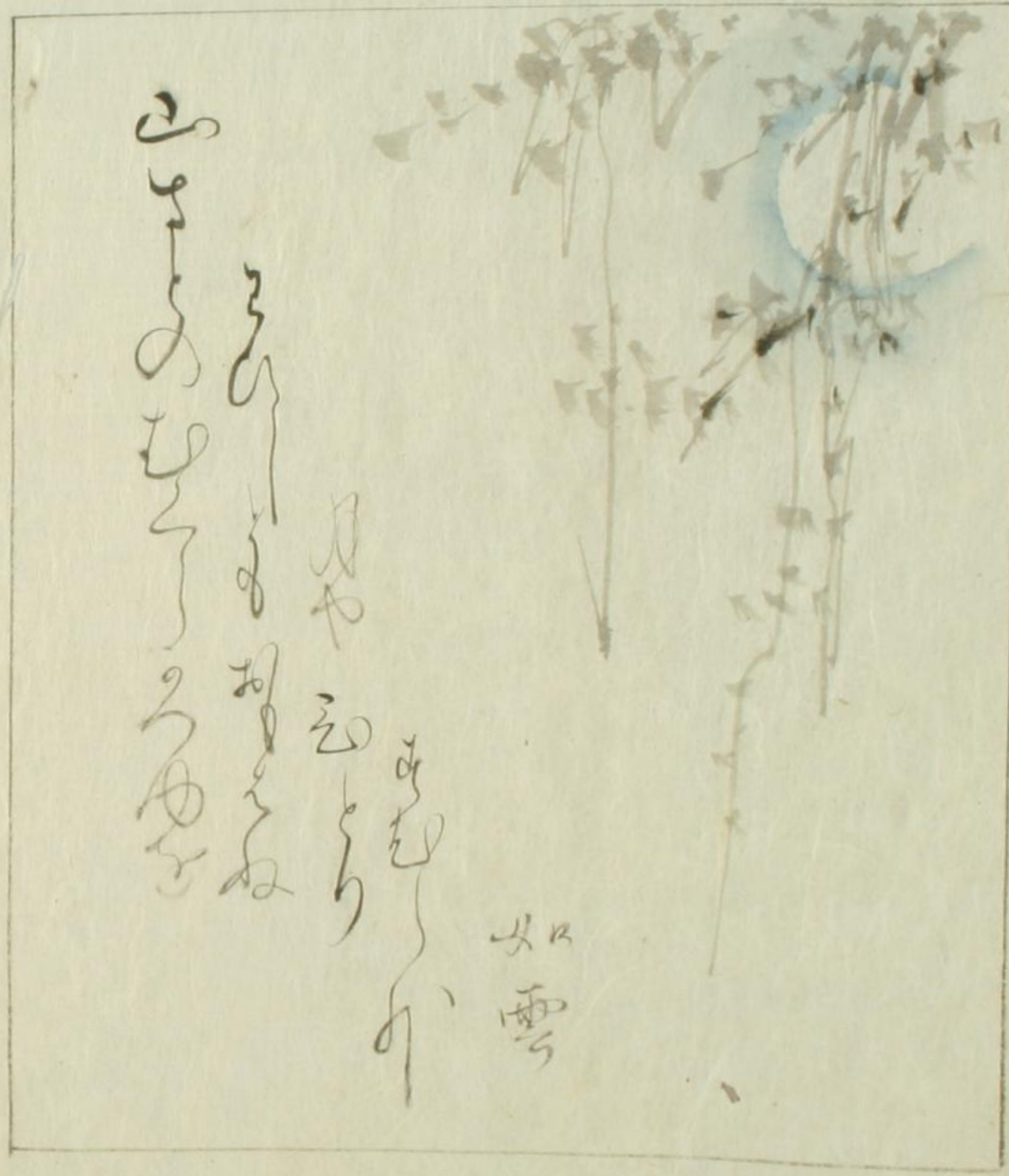




















霜の山陰道  
 ありちち  
 信



吉令  
 ありちち  
 川のみよみ





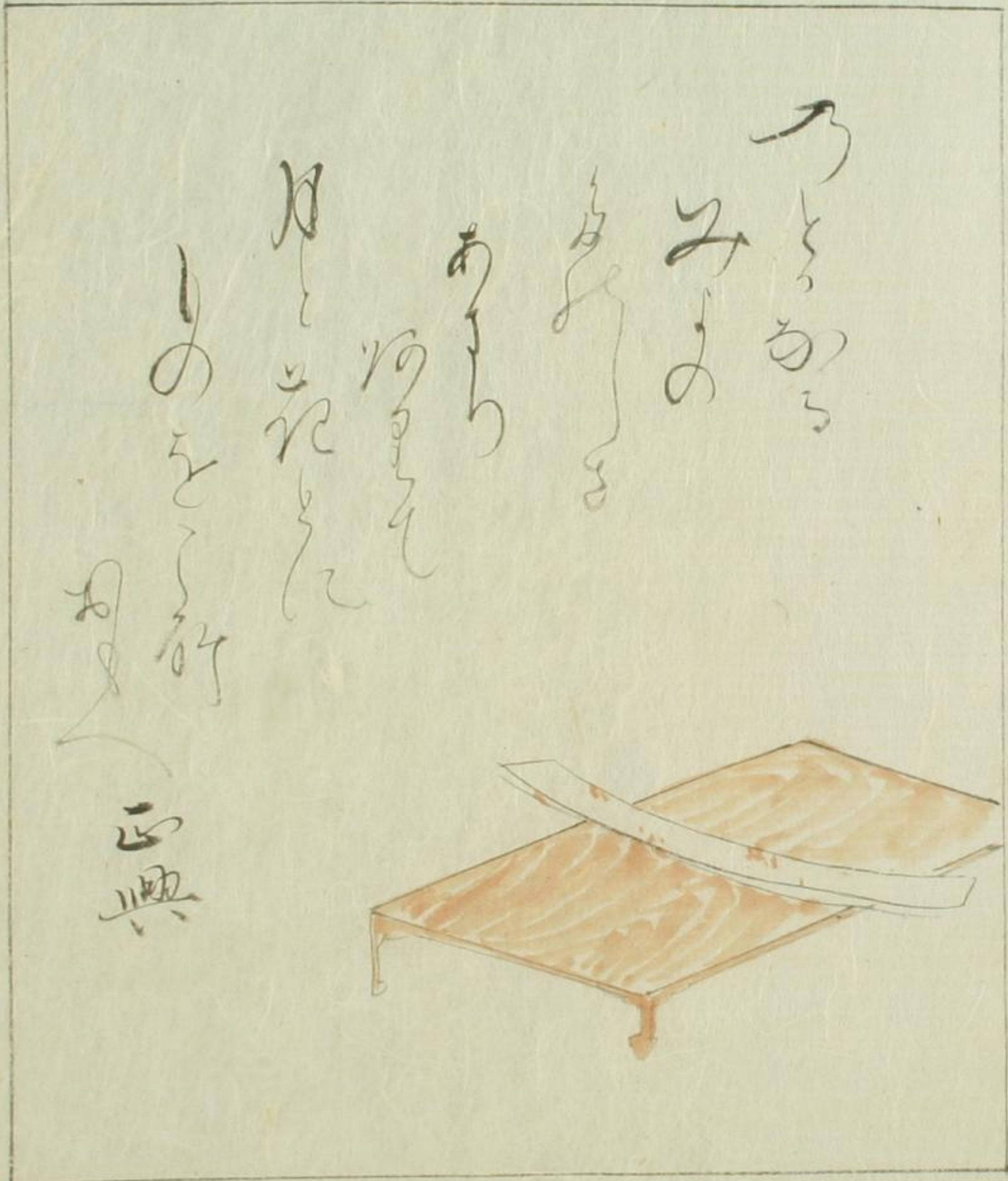






















正遠四王の此の末はわろし予は其の末にふと命をさした  
るの神と聞かむといふは秋風よりの風をいふは秋風よりの  
海もあつたをいふは秋風よりの風をいふは秋風よりの

景員古学をいふは秋風よりの風をいふは秋風よりの

如雲の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

有國の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

信令の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

伴英格の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

高蔭の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

政明の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

高蔭の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

重なる山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

好建の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

正興の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

茂高の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

はとや老翁の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

業者の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

高蔭の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

伴英格の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

信令の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

有國の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

如雲の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

景員古学をいふは秋風よりの風をいふは秋風よりの

元子古学をいふは秋風よりの風をいふは秋風よりの

正遠四王の此の末はわろし予は其の末にふと命をさした

るの神と聞かむといふは秋風よりの風をいふは秋風よりの

海もあつたをいふは秋風よりの風をいふは秋風よりの

はとや老翁の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの

業者の山は秋風よりの風をいふは秋風よりの



















者也本治中左典既源義朝之遊孔京師留寓此  
地為長田莊司所教權晉於此年其後別置年  
康賴為本國刺史私修其墳墓以寄水田如于

東鑑曰文治二年七月二十二日前延和年康賴法師浴恩及了  
為河波國麻羅保保司之旨所被仰也故左典既源義朝在尾張國野  
間莊益入千奉務後後只前藤之拜掩也而此康賴任中其國將  
寄於水田三十下建小堂令六日僧修石刻念佛仍為被酬其功

且繼絕與溪燈如善理建久年中在大將賴朝之上浴將  
初詣大御堂拜拜光者義朝以墳墓重建七字伽藍以尊  
真福矣國國無及之道場也

東鑑曰建久元年十月二十五日以前延和年康賴法師浴恩及了  
孝基為源賴朝者到于當國野間莊拜故左典既源義朝之廟堂  
雨未年月久遠後夷極矣至盛圓任將時傷其一益沒是  
故以先師長圓法師追崇景慕之為中其并山可謂當  
寺龜鑑也謹案長圓法師者俗姓源氏岩滑城主中山  
右衛門勝時第四男也其母則水師右衛門大夫忠政女而

傳通院太夫人女弟也長圓法師尊

東照神祖從弟故龜湯異常慶長中駐駕當寺將以山  
林俗而永赫于寺境賜朱章以為後徵且許逍遙山  
林葦黃磬香給以簡札可謂恩顧深重也

家忠日記曰慶長十六年四月十八日神若出浴  
二十二日至若古屋二十三日浴母至野間

雨未非冰野支族則不許住當寺二世秀圓法師時  
尾陽源敬公奉將野法求探幽西義朝之遭殺圖自  
書圖解一軸以賜之其辭義朝公佩刀賴朝公宿真  
東照神祖御梳等什物殊多先是

神祖許長圓法師以撰文之事給滿札有舊身師吉田  
年內畧名長圓法師一替冷笑顧年內曰汝浼我乎  
以刃割舌之其意放可怖也二世秀圓將以放廢焉  
捕獲二札附成滿年人王正兒











羅浮山西... 法... 傳... 事... 所... 本...  
 海... 行... 後... 是... 名... 所... 山... 所... 事...  
 一... 者... 山... 事... 所... 事...  
 右... 言... 了... 也

今... 入... 山... 路...  
 大... 坊... 志... 了...  
 所... 救... 者... 年... 事...  
 知... 友... 影... 乃... 少... 也

以... 故... 中... 折... 年... 事... 所... 事...

元... 今... 乃... 乃...

村... 成... 安... 永...

有... 長...

年... 所...







右の如き事ありしに... 界の地也

参河國山中

舞上八幡宮御由緒畧記

御朱印高百景松石

東照宮御相殿

舞上八幡宮

正月六

指禮

神主

竹尾上之総

御代替御礼

献上御禮大舞

御代替御礼

献上御禮大舞

御代替御礼

御時取二

右山中八幡宮之由緒

文武天皇三年秋九月九日山中先皇が誠心感應在り

豊前國宇佐之太宮より御鎮坐之由國之於他異

外旧社源家御守護也



靈神イハヒ...

御書家山先祖德翁若君山松平御氏為入山將也

御家連二度御筆業之方御大願之毎日之懈之志

御社家之他也

御代之孫御台心也乃為龍遊 山家連之社也

瑞雲院御代益御信心也 御言山道也

御才且御道種元天文十八年今所義元朝御也

賜り書文

權現様御誕生也此御本多平御也 御代也

御武運長久之御祈願也 御才御守花園將御城下

献上神主年左門安信行之御河上皇出御杯項我

益御武運長久之御祈也 御才社職編子之外治男

有之也御旗本可也 御才吉羅有蒙 益御武運

權現様御初陣也 御社家御祈願也為之當四守

郭城至鈴木易守之御合戦御勝利之儀御軍功

今川美元朝御也山中郷山返進有之也此御中平也

御言領也也近隣七村之為者也其是則御創業御領

世之根本也依之益御信心得也其後酒井與四郎藤

也 御才 宮津石坂御道也此御大鳥居石川

伯耆守也 御才御建 立也此御也

一 永祿六年一而宗一様也御

權現様御社家御危急之御大願有之

御身也乃德也不思儀之依 靈驗



御宗運迄其後實承度

大猷院様御上洛之御御宗詰御身隱山御由緒之依

舞木八幡宮相改舞上八幡宮奉稱御山字

御身隱山字可奉稱也

上意有之依之御上御夜

東照宮御身隱山舞上八幡宮相認未也則

御宗運御上洛只今極石室之唱有之也

權現様

台徳院様

大猷院様御上洛之御依御吉例神主御供仰

御舟札献上品之拜領物仕也則

台徳院様御杯

大猷院様御舟子等只今難有項茲仕也

一 實承十一年

大猷院様御上洛之御御社衆鳩石室御由緒也

御宮之御儀

東照宮様御合殿仰此殿承稱一年一換御老輩

御宮之御身隱山御由緒之依

御神靈之名留山第一之御由緒御座也右才夫より業

御本社祝詞殿拜殿葵御效御

御神宮類也御改御御免仰才明和承承兩

度御札有之則有社奉行仁田因幡守也御書御由緒也

瑞雲院様御指料長前東一節親皇孫領仕也







右者先朝之書上未出者  
御言御由諸英神主家御奉之符自之書記  
山老公記

安政三丙午正月

宗祇傳

宗祇者宗元之子也姓中臣氏飯尾其先世居  
北河丹藤氏夏元嗣欲得子一百日祈玉澤島  
明神滿期之夜夢玉子入十口而姓閱十有二月  
而誕時稱天皇應永二十八年歲在辛丑庚子  
念日也宗祇自童十廿和歌如能嗜之不厭聽  
就叔父宗初學習累年頗長遠歌管常喜  
愉於夢香玉原之事宗祇聽學感為祥瑞  
自稱種玉菴香岡心故在神能振和哥之名景  
望不止乃由南紀而遷北京為北京人盤結草庵  
于石倉之長谷師事心敬慣和歌及老莊粗得道  
利擢老莊之心自呼自然庵時東下野守常綠



兼嗣和歌之傳。於父野川益之。若莫遠非坐。以法  
竄彼東國。宗祇知邪。其罪歎和哥傳之。蔡文明三  
年。發表各關。左親。免常。致。清益和歌之道。  
緣感其政。至而傳。古今集。百萬葉集。至新統古  
今集。袖釋其中。自義。發以授。吾啓迪。伊勢源氏  
秋衣下。紉等物。語之。秋傳。相末。唱。吾祇。附而。歸京  
師。往來。五岳。舞。得。奏。禪。間。蒙。默。雲。禪。師。紺。錫。終  
稟。許。可。得。意。意。之後。不。定。君。外。為。浮。萍。客。遊。山。藪  
林。野。胡。方。吟。成。而。雨。至。雨。深。其。衣。不。知。落。魄。不。羈。不  
几。旅。泊。為。家。舍。四。海。岸。兄。弟。西。限。九。州。而。有。紫。紫  
紀。行。之。作。東。際。南。列。而。有。回。回。難。記。之。書。每。尋。名  
并。舊。跡。勝。地。靈。區。凡。足。跡。之。到。外。乘。輿。而。作。詩。哥  
其。德。廣。聚。影。隨。就。中。受。其。傳。者。肖。相。素。純。宗。長

宗碩等也。宗祇者。美髮好浴。香燒而熏。髮。酷  
似髮。髮。須。入。洞。其。所。路。訓。曰。我。詎。愛。髮。燦。燦。香。熏  
髮。須。則。其。素。久。留。氣。之。息。在。鼻。孔。下。不。斷。髮。燦。燦。耳  
祇及老邁。慈息。越之後。別。二載。宗長。至。孝。欲。省。宗。祇  
出。發。別。道。越。後。祇。深。喜。其。孝。念。長。不。獲。還。習。手。祇  
語。曰。欲。離。別。者。舊。識。往。彼。而。終。老。長。崗。宗。祇。之。情。不。可  
正。杖。持。而。去。越。後。道。歷。草。津。伊。加。保。要。路。溫。泉。而。治。暫  
沉。病。上。浴。畢。赴。途。途。中。病。深。至。寄。以。相。別。湯。本。郵。郎。暫  
展。外。具。就。枕。假。寢。夢。則。定。家。心。之。誦。式。子。內。親。王  
之。夢。覺。後。譚。誦。浩。然。脫。去。享。年。八。十。又。二。時。後。相。原  
帝。又。皇。二。年。歲。舍。至。以。七。月。晦。日。也。其。明。宗。長。宗。碩。素  
純。手。擔。棺。越。箱。額。葬。於。別。松。園。定。歸。年。秋。松。干  
墳。墓。上。未。期。之。事。詳。出。宗。長。所。修。年。宗。祇。終。事。記。



蕃山實錄

巨勢身幹編輯  
遷喬子考訂

系譜

先生姓源若伯繼曰熊澤氏曾野瓦氏父藤兵衛始  
仕于加藤左馬助山崎甲斐守後富方切熊澤氏喜三郎之女  
路之五條仍先生生元和己未五年生年安五條外祖熊澤喜三郎養子  
故曰熊澤氏其先尾張瀬邊人也熊澤年三郎  
仕東照公于三河年三郎要淺井備前公與甲斐信玄  
戰味方原年三郎勇戰而死其子喜三郎者  
先生之父也喜三郎漂于西海仕達亦屢受始理備前  
中納言福島左衛門為浪士居京家康公漸收從邦國之  
改名那右衛門又改其右衛門仕後顧慕年三郎之遺德令垂於氏儼其系子於瀬邊







○兼應甲午歲備之前述二列大飢先生惠政長天賑  
○先生在備前修堤池蓄濟硯上下豐饒備候梅  
○學教于國先生及弟與宗  
○先生遷明石其居鄰大山寺始僧徒雖忌惡後  
○遂服從其德  
○先生排佛只依公正無妬存爭角之意情故雖海者  
○氏志直誠明之輩者宗親先生者多  
○先生辭備前歷數年後備度創僧之濫停寺院之奢  
○邦內之僧念矣他邦傳聞者歸罪於先生  
○本朝道衰久矣文武之士猶不知道刻婦女或先生得  
○藤樹之心傳大弘此道女子志道者間有焉且樂師治  
○工弓馬藝士等聞先生之心法各得其技之妙音而多  
○本朝之上古神道王教盛行矣中古以降後復今總歌

樂兩藝可徵鑑古先生發本與道一之旨說惟正  
介神道之証安傳會以明其道  
○先生一日隱姓名吹越天樂之笛安倍成深尊聽之  
○曰此音那常入人心情之正矣吾律  
○先生掌發源我物結之做者中既通茂鄉屢嘆得其蘊  
先生為人威而不猛公候望之肅然兒女侍之溫字坐  
不倚卧不言食不語步行輿馬威儀不蕩動靜言語一  
無躑妄不敢游談飲食雖增物不餐過釣戈不詭過  
家事之大小吉凶不變容自妻子奴婢不違責然合家  
歲而和接人不倦雖承教人無責辱  
○先生聞世之襄人之窮則痛感如已有之或憂問先生  
○寂寥先生曰先暇且為善吾何寂寥之有或曰即今無  
為善之事適先生曰本心立千善則百行自盡亦為







凡多人の心を導きしを山と云ふは其の外の心を導きしを  
大和の心と云ふは其の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを  
此の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを

南部氷室の年事と云ふ

此の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを  
此の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを  
此の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを

此の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを  
此の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを  
此の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを

此の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを  
此の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを  
此の心を導きしを山と云ふは其の心を導きしを

先生没後其年 中根次常 欲勸先生曾孫假筆於予  
於是詳問系譜於先生之弟某 具正事 定於先生之門業  
記之如右 至道之正言 理之的語 則存先生所編之書 如  
先生之德體 義貴 則非先筆 得可悉 終摘其一 二  
而已 中根氏久親 矣先生之門 深恩厚 閱形容  
先生之行 實大 概如斯 云爾

元祿壬申 丑年 秋八月

巨勢貞幹誌















物たりしと云ふは好く文章ありて乃高き人なり  
是の指をたてしは此の儀に事ありては  
家にしては其の儀に事ありては早に指をたて  
は板倉氏の如く身は後世にせしむるは  
是より其の指をたてしは此の儀に事ありては

題考訂鹽尻首

張廣天師信員小者藤内遠見是代の末裔下野守景隆  
後圖融元承徳の曾孫長部少輔左兵衛尉官制融元承徳  
正安承祿四年三河信員生元正二年始  
信康生仕の祖也信康の祖也信康の祖也  
故の孝仕は太師信康の祖也信康の祖也  
た馬の嘉治の祖也信康の祖也信康の祖也  
の二重あり寛承元年より列の家也信康の祖也  
瑞龍の御代寛文七年より市井の末より信康の祖也  
を賜り自承元年より信康の祖也信康の祖也  
は改元父の筆書に列の宗令列の中道諸子生四  
志操の命を流信康の祖也信康の祖也



定曆中神年若山先生合と再再張列物志と撰て 正徳業  
先鋒火卷隊長と擢らるる名と治部改むる言傳八年  
病よりつゝ感時 けい五年張通利張通利の言傳八年  
又白草の行年 改南性改南性の言傳八年  
是九月八日卒 七十四 改南性改南性の言傳八年  
張列の後、張列の後 節訓と授し麻衣草衣麻衣草衣 日く  
表裏のる所は傳を身と風雲も傳ありて持たる  
一生著述の言傳ありと云ふ所もいふべし  
列の言傳ありと云ふ所もいふべし  
九子九子 言傳ありと云ふ所もいふべし

己め書

張列公言傳記方旧儀



